

ありがとう

—— 映画文学人生論

原作：平山讓 『還暦ルーキー』（2001年）「講談社」
監督：万田邦敏（2006年） 脚本：平山讓 仙頭武則
七字幸久 万田邦敏
出演：古市忠夫 赤井英和 撮影：三栗屋博 石坂拓郎
古市千賀代 田中好子 音楽：長寫寛幸
飯田美子 薬師丸ひろ子

俺も、おまえも、奇蹟を起こしたんや

日本人は災害に見舞われても奇蹟の復興をなしとげる能力に恵まれている。一九九五年一月十七日に神戸市を襲った阪神淡路大震災からの復興ぶりを描いた映画もあるはずだと、探しているうちに万田邦敏監督『ありがとう』のDVDを見つけた。

原作は平山讓『還暦ルーキー』。モデルはプロゴルファーの古市忠夫。私はゴルフのことはよくわからないが、プロゴルファーのテスト合格が狭き門、しかも、還暦間近の男が合格するのは至難の業ということは想像できる。

古市忠夫（赤井英和）は神戸市鷹取商店街でカメラ店を営んでいた。三日三晩燃え続けた火災で自分の家も全焼したが、地元消防団のボランティア活動をしていたという経験もあり、街の復興に向けて率先して取り組んだ。

自分のことは後まわしだったが、妻子がいればいつまでもそうしてはいられない。これからどうして暮らしていけばよいのか。そのとき、もうすぐ還暦の古市忠夫の頭にとてつもない発想がひらめいた。「プロゴルファーになろう」。

そう思ったのは、奇跡的に焼け残った車の中にゴルフバッグがあったためだ。震災のわずか一ヶ月前に、家主の依頼で別の駐車場へ車を移していた。料金は二万三千円から三万三千円へアップしたが、以前のままなら車もバッグも瓦礫になったはずだ。

「神様って、いるんやなあ」と古市は思った。



ありがとう

映画文学人生論

アマチュアとしての実績はあったが、プロへの道はきびしい。千八百人が参加した地区予選を勝ち抜いた百五十人が四日間にわたる最終テストで合格するのは五十人だけ、そのほとんどは二十代である。三十代でさえまれなのに、無謀にも還暦寸前のおっさんが挑戦しようというのだ。

プロテストを受けるには金もかかる。「百万はかかるやろな」と忠夫が言うと、妻の千賀代（田中好子）は呆れて、横を向いたが、テストの申込日前にはちゃんと百万円を用意していた。

奇蹟は起こるものである。古市忠夫はプロテストに合格し、「俺も、おまえも、奇蹟を起こしたんや」と、二十三歳の若者に言った。映画では、「おまえは奇蹟を起こせる男や。奇蹟を起こすんや」と自己暗示をかけている、暗示をかければ誰にでも奇蹟が起こるとは思えないが、古市忠夫の場合は暗示が情熱をかきたて、その情熱が周囲の人々を巻き込んだ。

二〇一一年三月十一日、こんどは東日本大震災が発生、青べか村も被災した。被害軽微の私には奇蹟は何も起こっていないが、しいていえば、数年前、隣の自治会防災部長に誘われて、阪神淡路大震災経験者の講演を聞いたことがある。その講演者の名前が古市忠夫だった。今は奇蹟のおすそわけにあずかったような気がしている。

焼跡に奇蹟のゴルフバッグ無事